

# 『後日／百太老寿草紙』翻刻

松 原 哲 子

『後日／百太老寿草紙』<sup>注1</sup>は鱗形屋から刊行された、三冊物の草双紙である。柱題は「も、太郎」、十五丁裏の作中署名から鳥居清満画であることが確認できる。現存の大東急記念文庫本は、上中下巻合綴の改装本だが、青色の外題簽と紅色の絵題簽が一对の中巻原題簽が伴うことから、初摺の新版として刊行されたと推定される。

本書の外題簽上部には隸書体で「新版」の文字が配されているが、これは宝暦期半ばから末までに使用された、楷書体の「新版」の文字が配されたものとは様式が異なっており、鱗形屋が二枚題簽を用いた宝暦期半ばから安永期初めごろの新版草双紙のうち、当該年の題簽の様式が確定しない宝暦九年（一七五九）、宝暦十一年（一七六一）および明和三年（一七六六）のいずれかの年に刊行されたもの

と推定される。<sup>注2</sup>

鱗形屋板の二枚題簽の意匠のうち、当該年が明らかでないものには、本書に付される隸書体「新版」字を配したものの他に、外題簽上部に錦袋の絵を配したものがある。拙稿「明和三年刊鱗形屋板草双紙に関する検討」〔『実践国文学』第七十三号、平成二十年三月〕では、これら二つの意匠の題簽を有する現存作品について、それぞれの年代推定を試みた。その結果、錦袋の意匠の題簽を有する作品のうち、「源氏重代／友切丸」に明和二年（一七六五）十一月江戸市村座初演「降積花二代源氏」一番目「蜘蛛糸梓弦」の影響がみとめられることから、錦袋の題簽は明和三年の新版のものであり、したがって隸書体の「新版」字の題簽は、残る宝暦九年もしくは宝暦十一年の新版のものである

可能性が高いと推定した。

錦袋の題簽が明和三年のものだと明確にするには、隸書体「新板」字の題簽を有する作品が明和三年ではないこと、もしくは他の年の刊行であることを示す必要があるが、この様式の題簽を有する現存作品<sup>注4</sup>のうち、内容から成立年代を絞り込める要素を有するのは、『後日／百太老寿草紙』のみと推定される。

よって、本作品の刊年を明らかにすることは、鱗形屋板草双紙を編年のに追い、その出版活動を検討していく上で非常に重要である。そこで、本稿ではその翻刻を試み、紹介するものである。

これまでに気付いた点を幾つか挙げると以下の通りである。

本書三丁裏・四丁表の、平維盛が世を逃れ、臣下の与三兵衛重景・石童丸・武里の三人を連れて阿波国にやって来る場面で、維盛が「弥介」と名を変えるのは、延享四年（二七七七）大坂竹本座初演の浄瑠璃「義経千本桜」の影響とみられ、江戸での上演もあつたものと推察される。

三丁裏に「市川らい蔵」、四丁表に「吉田文三郎」の名がみえる。初代市川雷蔵の名跡期間は宝暦十一年（一七六一）から明和四年（二七七七）、吉田文三郎は宝暦十年（二七六〇）没なので、本書は宝暦末から明和初年の刊行

とするのが順当である。

作中に散見される「ならづのもりのほと、ぎす」（二丁表）、「ほうかしの小がたなでのみこみすがた」（四丁表）、「しわいのね」（七丁表）といった言葉遊びの語句は、宝暦期後半から安永期の鱗形屋板草双紙を特徴づけるものである。

十一丁裏に「あんぼんたんのおやだま」という言葉がみえ、これは『嬉遊笑覧』で宝暦十三年ごろの流行語とされるものである。<sup>注5</sup>

以上のように、『後日／百太老寿草紙』の成立年代を内容から探っても、宝暦期末から明和初年のころまでとしか絞り込むことが出来ず、先に挙げた錦袋の題簽が明和三年のものであることを証明することにならない。よって、本書についてさらに精査する必要がある。

今後明らかにしていきたい点を挙げると、登場人物の袖印の問題がある。一丁裏・二丁表には、武清治を捕らえる人間として、二人の人物が袖印を有するかたちで描かれている（「祐」と「直」）。また、十一丁裏・十二丁表にも仇次右衛門の手下として袖印を有する登場人物が描かれている（「利」と「高」）。これらの登場人物は、作中で全く人物紹介もされず、氏名も挙げられていない。よって、これら四人の袖印には何らかの具体的な典拠があると考えられ

る。また、うつばや武清治・わん屋五喜平・仇次右衛門といった主要な登場人物についても、本書の創作ではなく、何かしらの典拠があるものと推察される。もし、これらの登場人物名の典拠を宝暦期末から明和初年成立の他文芸に見出すことができれば、本書の成立年代を絞り込むことも可能になってくる。

また、本書は桃太郎を題材としているが、後日譚というあり方は草双紙での桃太郎物の典型のひとつである。これは、黄表紙において盛んに材に採られたもので、本書はそれらに先行して成された作品といえる。よって、本書は鱗形屋の出版活動という側面に加え、内容の面から編年的に草双紙全般のあり方を追う上でもひとつの指標となる作品であると考えられる。

注1 『大東急記念文庫所蔵 江戸文学総瞰』（マイクログラフ

ム、川瀬一馬編、雄松堂フィルム出版）所収。

2 拙稿「鱗形屋板絵外題考」（『近世文芸』第八十七号、平成二十年一月、日本近世文学会）

3 『源氏重代／友切丸』（五冊物、鳥居清満画）、『伊勢海道／銭掛松』（三冊物、画工名なし）、『伊勢風流／続松紀原』（三冊物、画工名なし）、『三友会濫觴』（三冊物、画工名なし）がある。なお、『源氏重代／友切丸』につい

ては、『実践国文学』第七十四号（平成二十年十月）に影印および翻刻を紹介した。

4 『後日／百太郎寿草紙』の他に『鴻巣禿倉』（二冊物、鳥居清満画）、『唐尺寸法／奈良大仏伝』（二冊物、画工名なし）がある。

5 勝田敏勝氏「『あんぼんたん』（黒本）翻字と解説」（『叢』第二号昭和五十四年十一月）。なお、以上の指摘については先掲の拙稿「昭和三年刊鱗形屋板草双紙に関する検討」で詳しく取り上げた。

## 付記

本稿を成すにあたり、資料の調査・掲載を許可下さりました大東急記念文庫に深謝いたします。

（まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師 実践女子大学大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）

## 後日／百太郎寿草紙 翻字

翻字に際しては、大東急記念文庫本を底本とし、文節・文の区切り目に適宜空白を挿入し、科白部分については、

発話者を（ ）内に示し、「」を付した。また、破損等  
によって判読不能の箇所については、□で示した。

○上巻

(二丁表)

おとぎぼうごというさうしはさまのあやしきばけ  
物ばなし又はかはつた事をかきのせたり その中に京  
の町にうつばや武清治といふ者さるをかいていろく  
のぬすみするよし 其ころくまの、わん屋五喜平といふ  
わざものこゝに來り どころぼうのくふうしてあくじをた  
くむ

さる引物がたりする

(五喜平)「さてく、あのさるはきめうく、あれをせ  
んだつにしてなげ物をしたら 銭金はつかみ取 大で

けく」

(猿)「きやアく」

(二丁裏・二丁表)

まづ心見にふしみの町やへさるをてびきしてよとうに  
入しが うんつきて 武清治はとらへられてうせぬ

(「中」字のある提灯を手にした女)「こいつがつらは 大み

そかに生れたいたちを見るようふなきよろくとし  
たつらでござる まづく、り付たがまし」

(袖印が「祐」の男)「あまくちな 今どきあさ□□□もの  
か ふとひつらだ」

(武清治)「こいされませふ こんとから いたしますま  
い」

※袖印が「直」の男、「祐」の男と共に武  
清治を捕らえる。

五喜平はした、かものなりければ 武清治にぬすみいた  
させその身は何もとらずにかのさるをせおいてくまの  
へかへる

(五喜平)「なむさん 清治めはぶつちめられたな おれは

此さるさへあれば よしのせんべい なんでもくにも

とへいつて 大ばねのおちをとらねばならづのもりの

ほと、ぎす あ、はらがへつた さるめもひだるか

らふ」

(二丁裏・三丁表)

きのくにくまの山といふは山々たにく、ふかうして大  
とうのみやもこまり給ふほどのしんざん也 此所に長じゆ  
のよはひをへし 百太老といふ御らうじん 百才をへてす

ねん ふたいにあた次右衛門といふわるおやぢあり  
も、たらうの一人むすめ有ても、ぞのといふ そのうつ  
くしき事たとへんかたなし

(百太老)「あの子にむこをとつておれもらくくどゐん  
きよがしたい」

(仇次右衛門)「さればよいむこと殿が□ざりませふ」

てがいにしろいぬ有てよくも、ぞのになつくもとよ  
りむすめ心ざしやさしければ山よりきぢいつわおり  
くきてこれもよくなつきけり

(桃園)「此ぢちはようわしになついたはいの それなん  
ぞくわせてたも」

(侍女)「あさばん見ますればおまへさんのようなうつく  
しいおかほはござりませぬ よいむこさまがはやく  
ござればよいが」

(桃園)「さいのうわしもそれをねがふてゐるわいの き  
じよこいくゝゑをくわしよ こゝくゝくゝ」

### (三丁裏・四丁表)

こゝに一とせさぬきのやしまにてほつらくの後平の  
しげもりのちやくしこれもりうみにしづみしといつわり  
世をのがれ給ふとかや ふだいのさむらひ与三兵衛ぜう

しけかげ石とう丸といふせぬば一人たけさと、いふこね  
りい上四人やしまをのがれ四国のあわにつく

(与三兵衛)「今からおまへ様をやらうあたまにして市川  
らい蔵といふしうちをなされたらいろがとれませう  
まづこぢつけてごらうじませ」

此所にてこれもりさかやきそりてやらうあたまとな  
りそれよりみくまの御山をふしおがみ給ふ これもりは  
弥すけとなをかへへいにんのさむらいになり給ふ

(石童丸)「中びんにして吉田文三郎といふふうにかみを  
たのむぞや」

(武里)「わかんだんなそこゝにすいた事はござりませぬ  
われらほうかしの小がたなでのみこみすがたのひと  
つまへといふ事はあげまきのすけ六からののはじまり  
じや」

### (四丁裏・五丁表)

かくてわんや五喜平はふるさとへさるをつれきたりけ  
れば五喜平のは、ほとんよくふかくふてきのば、あに  
て所にてにくみふたますば、といゑりかねく百太老  
がむこに五喜平をせんとおよばぬ事をのぞみけり

(二舛婆)「なんでもとなりのいろむすめに おれがむすこ  
をふつくらせて 御めんきよさまにならねばおかぬ

此さるもきやうげんのたねだ も、をくはせてあや  
なしておきましょ」

そのくせいろには目のなきぐにんなればふみこまぐ  
とした、めさるにもたせても、ぞのかたへおくりけるぞ  
いやらしき

(五喜平)「おれはぶこつでいろふみはかきにくひさし

あいなしにおふくろもんごんたのみんす」

(二舛婆)「どれく文して申入候可候 てまへ事そもじ様

へくびだけほれぬき候可候 一とでもはんふんでも  
かなへ下さる可候 其かはりにおすきのくい物たくさ  
んにしんじ申べきあいだいろよき御へんじたのみ候  
可候 御へんじをはやく御こしのまはりへ手がやりた  
いとそれをまつむしのちんちろりんかしとそれであ  
つちからうつ、のやけになつてくるぞこれ□□…てく  
るぞ これにより□□□□の□ん□る□□」

### (五丁裏)

それよりこれもりしうく四人那智なちの山のこりなくめ  
ぐりていそべの松の木をけづりていつしゆをかき小そ  
でを松がへにかけてうみにしづみしていにもてなし給ふ  
とぞ

元暦元年三月廿八日 権亮三位中将平維盛 廿七歳

主従三人入水

じせい

うまれては つゐにしぬてふ 事のみぞ

さだめなき世に さだめ有けり

此じせいを見て

(通りがかりの者たち)「さてはこれもり殿はうみへはま  
られたか いたわしやく」

### ○中巻

### (六丁表)

たびのさむらい山みちにまよひたるていにて此所にきた  
りやどをかる あだ次人々を見て いけすかぬ事と思へ  
どそのとをりをも、たらうへ申 も、ぞのは弥介をひと  
め見るより恋のふちとなる

(桃園)「とまらしましやいのふく」

(武里)「おやちどの 一夜とめて下され ちよと見た所が

此やにみやこはだしといふむすめが見へます ずい

ぶんあやなされまして御もつ共にぞんじます」

(弥介)「おれもそのとをり なんでもぬれ事をこち付て

こ、のむことでたい 手いらすかしらぬまてしたが

今じぶんは すいた事のない世の中じや さりながら

にいまくらにほねがおれいでよい はやくねたい物  
じや」

(六丁裏・七丁表)

(弥介)「それはみな此ほうから申事 おまへのやうなうつくしいる様に御めにかゝるも ぜんぜのゐんねんちとさうだんもござれ共 おなじみもなくて申にくいとうりう中 ゆるく〜と御はなし申さん」

(桃園)「かゝる山がへ おまへさんのやうな なさけらしい御かたのお出なさるも たせうの御ゑんとやら いつでもこゝにいなさんせや けふは大吉日でござんす そのおはなしを はやうき、たいはいなあ」

も、たらう百よさいのたのしみも、をあまたうへおいてたのしむ せいおう母がも、大きさちやわんほどになりておびたし 人々も、をほめる

(武里)「さて〜見事なも、でござる どうぞならう事なら一つたべてみたい事かな」

(与三兵衛)「イヤこれは見事〜 此山を見きりにかいたい ながとみてうへ出したら よい金もうけであらふ」

(仇次右衛門)「さて お三人へ申ます こちのおやかたは

うわべはあのやうにけつかうに見へてもないしん  
はしわひのねで御ざる はやくみんなもかへらしやい  
かう申もおためじや は、は、は」

(七丁裏・八丁表)

さるはかしこくも五喜平がふみをも、そのへまいらせへんじをとりてかへるを見れば 此ごろ来りしたび人のいろ文なり がうはらにへかへり まづ此たび人をさきへし まはんとくめんする

(五喜平)「どふしてやらふぞ どん酒にせうか ふぐじるでころそか」

(二舛婆)「どうだ いろよきへんじがきたか さつまいもでもよこせといふてきたか よたかそば切でもくはせろやい」

(五喜平)「ゑ、はらの立 あのだむらいめいもざしにせうか ぶつちめようがあるぞ」

さるほどに 百たらうたび人の人がらを見たてさいわいむこにせばやと思ひ 山おくにくはんぜうしたる せい王母のみやへ 弥介をとものふても、そのへ行  
(弥介)「さて〜 ひろい御すまいかな そして ふうがな御ものすき いやはやどうも〜」

(百太老)「御きやくこれから山おくの西王母大明神のや  
しろへともなひ申ぞ」

(桃園)「もうしとつさん ちとさ、でもあがりませ あ

なたへも上なさんせ」

てがいのいぬつきそいくる

(八丁裏・九丁表)

ふたますば、も、たらうをやきころさんと ひそかにね  
らひよるも、たらうこしに付たるひやうたん酒によい  
てくさをまくらにふせり給ふ ば、じぶんはよしとた  
ばこのみながらくさむらに火をかける

おりふし 風はげしくも、たらうあやうし

(犬)「わんくく」

(弥介)「ゐんきよ様はどこへござつたやら もうしく

さてもあの娘はきついとをり物 ほんの これがいな  
かに京有 あすのばんにはよいからねようぞ」

てがいのいぬ川にひたりても、たらうのふしたるきん  
へんの草へ身ぶるいひしては水をそ、ぎ ついに火をしめ  
しける いぬはしゆじんのおんをしる事 人げんにひとし  
くやさしきけだものなり

(犬)「わんくく ぶるくく」

(二舛婆)「ぢ、いめが もうくだばりそうふな物じや あ

のちく生めは あぢな身ぶりをひつく がてんがゆか

ぬ としよつて こんなじつ事もちとやつて見ねばな

らぬ なんまみだく」

(九丁裏・十丁表)

此ほどの恋風たがひに身にしみせい王母のやしるにて  
たがいにあはんとやくそくして弥介来る所に ふしぎや  
きじ一羽とびきたりて あしあとにこのもんじあらわれ  
たり さては此はしをわたるときは ころさるゝとざとり  
てはしをわたらずしてかへりけるぞ はつめい也

(雉の足跡)「有煩惱心今此生死」

ほんのうの心あれば 此はしをわたると 今こゝでいきた  
るものたちまちしするといふもんじをきじ あしあとに  
かきてしらす

(弥介)「さてはわがいのち しんめいのたすけ給ふか あ

りがたやく」

五喜平今じぶんは さだめて たび人いもさしにつらぬか  
れて川へおちつらんと見れば はしは何事もなし さては  
しかけがちがひつらんとわたりみければ おのれがたく  
みし はしのおとしあなより川へおちて つるぎにぐすとつ



らぬかれ ついにむなしくなりけるぞ こゝちよかりしし  
だい也

(五喜平)「ア、せまいものだて さ、でおれがしめられ  
た ア、いたいゝ せつないゝ」

(十丁裏)

も、たらう吉日をゑらみ むすめと弥介をひそかに こん  
れいと、のへいゑのたからも、のかゞみも、のつえを  
おかませ すゑはんじやうをいわふ

(百太老)「これゝゝむこ殿 此二しなのたからは 桃太郎よ  
りつたわりしたから物 むこひきでにわたし申ぞ 行  
すへ久しうともしらがまで中よく召れ」

(弥介)「身にあまりある ありがたふぞんじまする 女ほ  
う共一つのみやれ」

(桃園)「あいゝ あゝゝ」

○下巻

(十一丁表)

ある時 ふたますば、せきだいに二つなりしも、を出し  
これはくるしからず 御ちそうにまいらせんと三人の者に  
ふるまふ 三人の者 何の心もなく しゃうくはんしてよ

ろこぶ

(与三兵衛・武里)「ばあさん御心ざし忝い しかしたべ  
てもしりはきはせまいかな」

(二妯婆)「なんのしりがきませふぞ まいれゝ」

せいわう母のもの、の木

(十二丁裏・十二丁表)

かゝる所へあだ次右衛門 外よりかへり 此ていを見て  
あのも、はせいわう母おしませ給ふなり それをくらう人  
も人 ふるまふ人□□申わけもあるまじきといかりつめ  
かくる

(袖印が「利」の男)「べらぼうめら たまつて はやくく  
たばれ あんほんたんのおやだまめらが」

(袖印が「高」の男)「こゝとはいわずとはやくなくなれ

そりやござんすまい」

ふたますば、いひわけなく つちぐものどくをくいて  
むなしくなる 此ていを見て 三人の者申しわけは此通り  
なりとて 三人はらを切て相はつる あた次 ふたます 其  
外あく人ばらしすましたりとよろこぶ ば、はそらじに  
して いきかへる

(与三兵衛)「まことやもろこしのしよかつ孔明が二桃三

士殺しをころすとうたひしも今われくが身の上にあたりけり

(武里)「さてくおそろしいはかりことにあふて命をす

つる事のむねんさよ われらがだんなはなぜおそいやら

(石童丸)「エ、むねん くちおしや もはや しゃばのいとまごい」

(十二丁裏・十三丁表)

も、ぞのは心やさしくちくるい とりのたぐひまでふびんがりける 月に一どづ、きびのだんごをこしらへてくわせける となりの五喜平がさるものちは此所にとゞまりて内へかへらす

(桃園)「もう およしなさい さるめはいくらたへてもいやしひさるじや こりやく さるもいぬもこいく」

(弥介)「はて扱よくなじみ申た しほらしの事でござる」

百太らう外よりかへり 三人のせつふく何ゆへにかくのてい也とせんぎすれば 大せつなるも、をことわりもなぐくらひて申わけなきよし われくひたすらせつふく

をとゞめ申せしがかくのをりでござるといふ

せんせい がてんゆかずも、のつゑにて兩人をてうちやくし 此のちあくしんをやめよと ゐけんせらる

(百太老)「そちたちは年にもはぢよ もう此やうなあくじはせぬがよいぞ」

(仇次右衛門)「これにこりぬものがござりませふか」  
(二婢婆)「此のちは ふつつりとあくじをやめて 大じつ事をいたしませふ あいく」

(十三丁裏・十四丁表)

あた次 ふたます こりもせず 又百太らうをころさんとする時、のかゞみをてらしければ あた次もば、も口ばしり これみなわれくがよくしん也 され共 此しんだい半ぶんよこせと いかみかゝる時にくだんのさる あた次がきんだまをとつてしめころす

(猿)「きやつく」  
(仇次右衛門)「さるとはせつない さるにても こ、をゆるしてくれよ あ、目がまふぞく」

(捕り手の男)「おやじ 日ごろを思ひしつたか ずいぶんむくさるなめく」

いぬは ふたますがのんどへくひつきてくひころす  
(犬)「う、わんく ふぎやく」

大あくをたくみしむくひによつて 兩人ちくるいのため  
にころされしこそあわれなれ

(百太老)「さあ百年めだ ねんぶつうばがいけよりつかを  
とりそふな おそろしいしかみづら ば、あめ よいき  
みだ〜」

#### (十四丁裏・十五丁表)

其むかしも、太郎といふあか本を見れば いぬとさるに  
きじがかせいして おにがしまへわたりて たから物をえ  
てかへりしといふ事あり 此そうしはそのあか本にすが  
りて 百といふじはも、とよめば 百ねんのよわひをのべし  
らうじんといふてにはをくわへ それに いつものわるぢぢ  
ば、のたわれ事をまじへ 児女のなぐさみとなすのみ

かくて 百太らう心にかないしむこをとり むすめにめあ  
はせける その、ち 西王母あまくだり 三人をぐして 天  
にのほり給ふぞありがたき

そも〜も、太郎といふ事は かくもあらんか

桃は五木の精 玉衡星さんじて生ず 鬼をせいするに

は 桃の鞭をもつて これを駆といふ 蓋 仙木也と新語園  
に見へたり

#### (十五丁裏)

いぬは はなはだ其るいおほく ちばし 長きは 獺にきめ  
う有 みぢかきは よくほへて 夜をまもる しうをよくし  
り 三年にして わすれずといへり

さるは 其しやうさわがしく きはめて おもてをよくぬぐ  
う 手あし人のごとく 立て行し ゆうする事 又 人げんの  
ごとく ちうやせは しくあがきて くだびる、なし

きじは こゑきさぎよき鳥なり おん鳥女鳥むつまじく  
ちゑ有鳥也 されば もろこしの 雉鳥飛操のこじあり

されば しうのいのちをたすけし きじの心は ちなり 又  
あく人を見つけて しうに しらせしいぬは じんなり し  
うをころさんとするあく人をいかみころして てがらをせ  
し さるは ゆうなり

#### 鳥居清満画